

8 収 穫

(1) 収穫前の水管理

稲は成熟期まで水を吸い、穂へ養分を送るため、落水が早過ぎると粒の肥大が完全でなくなる。このため、茶米や死米が多くなったり、胴割粒の発生要因となる。また、胴割粒は登熟初期の高温多照条件で増加し、特に出穂後10日間の日最高気温との関連が強く、夏期高温年は胴割粒多発の危険性が高くなる。

近年、年次間の気象変動が大きくなっており、夏期高温年に遭遇する可能性が高い。胴割粒の発生を少なくするためには、登熟後半の水管理がキーポイントとなる。収穫時に、長靴の足跡の深さが2 cm以内なら、作業に支障をきたさないため、成熟期の5日前までは、土壌水分80～90%（排水溝に半分程度の水がたまっている状態、あるいは、長靴の足跡がはっきりと付く状態）にしておくことが必要である（V-5 水管理を参照）。

しかし、これは目安であって、その後も、田面が乾くようであれば、胴割粒が発生しやすくなるため、収穫作業に支障がない限り、走水程度のかん水を行うことが必要である。なお、酒米品種で胴割粒が混入すると、主食用以上に製品歩留まりが悪くなり、実需者から嫌われるので、登熟後半の水管理に留意する。

(2) 収穫時期

収穫時期は、まず表V-8-1を目安に各筆ごとに成熟期を推定する。刈り取り適期は籾黄化率が85～90%の状態のときである。籾黄化率50%から刈り取り適期である籾黄化率85%まで、およそ7日間である。その時期が近づいたらほ場に入って穂を観察し、枝梗の黄化程度を勘案して総合的に判断する。そのときに「収穫適期判定板」を利用すると籾黄化率が判断しやすい（次頁、参考資料）。

なお、夏期高温年は、出穂から刈り取り適期までの日数が短くなるため、早めに穂を観察して刈り取り適期を把握する。

収穫時期が早すぎると、籾水分が高いため、乾燥経費がかさみ、青未熟粒の発生が多くなる。逆に遅すぎると立毛中の胴割れや茶米の発生など、被害粒が増加するとともに、玄米光沢が低下するなど品質が低下する（図V-8-1）。特にキヌヒカリは刈り遅れて降雨に遭うと穂発芽しやすいので注意する。

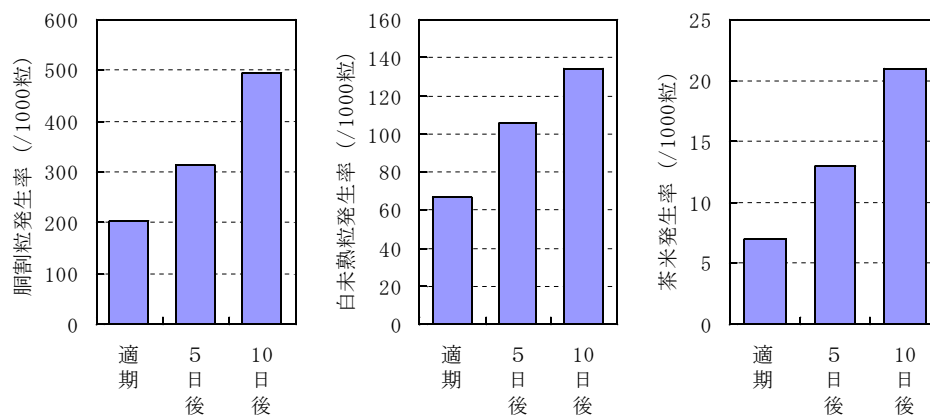
また、もち米の収穫は籾黄化率90%程度で行い、早刈りによる未熟粒の混入や刈り遅れによる立毛胴割の多発、玄米光沢の劣化等を防止する。

酒米については、加工上、胴割れを極力防ぐ必要があることから、刈り遅れないよう注意する。

表V-8-1 刈り取り適期の目安

作期・品種		出穂後日数	出穂後積算温度
早期（極早生）		30～35日	900℃前後
早植	キヌヒカリ レーク65	約35日	900℃前後
	コシヒカリ ゆめおうみ	約35日	900～950℃
	日本晴 吟おうみ 秋の詩	35～40日	950℃前後
	滋賀羽二重糯	約40日	950℃前後
普通植		50～55日	—

注）水稻奨励品種決定調査試験（安土町大中）2000～2009年（10年間）の平均値を目安とした。



図V-8-1 刈り遅れが玄米品質に及ぼす影響（滋賀農技セ 2008 年）

注) 品種：コシヒカリ

胴割粒：検査等級に影響しない軽微なものを含む。

白未熟粒：穀粒判別器による乳白、基部未熟、腹白の合計。

茶米：薄茶米を含む。



収穫適期判定板（近江米振興協会）

収穫適期判定板の使い方

- ① ほ場全体を見て、平均的な場所に入ります。
- ② 穂に判定板（上図）の色がついている部分をあてます。
- ③ 黄色く熟した籾の割合を見て収穫時期を判断します。（判定板の色は熟した籾の色の目安です。）
※籾黄化率 50%を確認してから約7日後を収穫時期の目安とします。その目安日が近づいたら、もう一度、判定板で籾黄化率、枝梗の黄化程度を確認し、収穫日を調整してください。

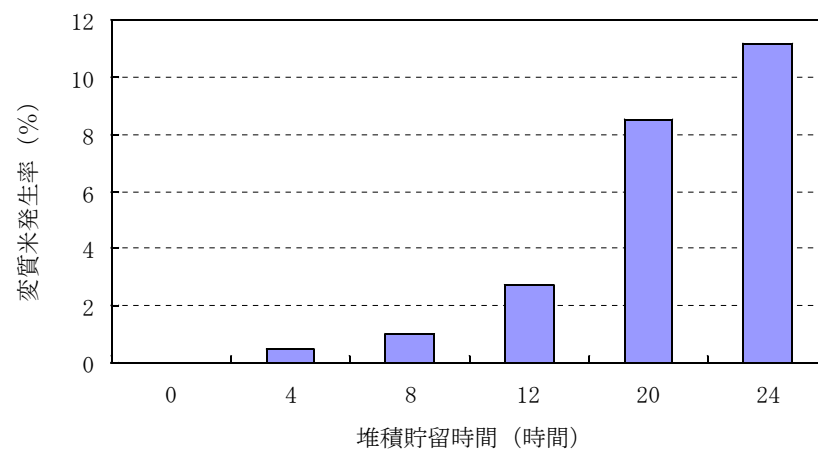
(3) コンバイン収穫に当たっての留意点

早朝や夕刻には、稲に露がつくことが多く、降雨時や降雨後には、稲が濡れた状態になっている。このような状態で作業を行うと、脱穀部内に切断された葉やワラが付着しトラブルが発生するため、このような状況での作業は避ける。

(4) ムレ米の防止

ムレ米は、収穫時にできる玄米表面の傷に種々のカビや細菌が繁殖して引き起こすもので、玄米の表面に斑紋ができたり、着色したりするため、検査の際に厳しくチェックされる。

収穫時の籾水分や温度が高いほど、発生しやすくなるため、生籾はそのまま放置せず、収穫後4時間以内に通風乾燥するか、施設に搬入する。特に、高水分籾には注意が必要である（図V-8-2）。



図V-8-2 堆積貯留時間と変質米発生率（富山農試 1996 年）
注）変質米：玄米に斑紋が認められるもの。